



「こころ」(1回掲載)

東日本大震災をきっかけに東北各地で被災者が集った「臨末宗教者」の公共性問題で心のケアを担う宗教者の活動は急速に拡大した。被災地でも同様の活動が開かれよう。津波が広がった

広がる臨床宗教師

超宗派で公共性担保

被災者支援の一端として、東北大に実践宗教学寄付講座、医療、福祉関係者、一



被災地「臨末宗教者」研修会の参加者。被災地の風景を背景に、多くの人が集まり、活動に参加している。

被災者支援の一端として、東北大に実践宗教学寄付講座、医療、福祉関係者、一



九州福岡の教会を会場に開いた入道講座であり、多くの臨末宗教者が参加した。写真：西出勇志

支部設立、連携の大学も

まだ少数だが、臨床宗教師「とも言い、一教団より師として働く人も出始め、超宗派というフィルターをた。僧侶の田中至道さんは、公共性を担保しやすいため、今春から岐阜県大垣市の沼口医療（沼口病院）に臨床宗教師の副業で勤務して、緩和ケアを含めた在宅医療に力を入れる沼口院長が、医療現場、特に在宅医療の現場に宗教者が必要との思いから導入を決めた。



高齢の患者宅を訪問、さまざまな会話を交わす沼口医療臨床宗教師の田中至道さん（中央）ら。岐阜県大垣市

また、公共性が求められる。臨床宗教師を構想し、東北大の実践宗教学寄付講座開設に尽力したのは、宮城県で在宅緩和ケアに取り組んだ故岡部健医師。研修の際、岡部医師の写真が常に受講生を見守る。ただ、岡部は「臨床宗教師」を独占するつもりはない、という。名称を浸透させて臨床の場を拡大し、社会のニーズに応えたいとの思いがあるからだ。